

2025年度学生による前期授業評価アンケートへの 教員からのコメント

【稚内本校】基礎演習Ⅰ/小林 伸行・佐藤 結花・松坂 公暉・伊藤 良平

まず、授業の難易度を尋ねた設問6で27.3%(3名)が「とても難しかった」、45.5%(5名)が「難しかった」と回答し(、残りの27.3%(3名)は「どちらともいえない」と回答し)ていることから、例年になく高度な内容と感じる学生の割合が多かったか、実際に学生にとって高度な内容の授業を進めてしまっていた可能性が高いことが強く示唆されます。

ただ、意欲を尋ねた設問5では、過半数の54.5%(6名)が「意欲的」と回答し、「意欲的とはいえない」と回答したのは9.1%(1名)に留まって(おり、残りの36.4%は「どちらともいえない」と回答して)いることから、難易度の高さが直接的に学習効果に負の影響を与えた可能性は例年よりもかなり低いことも同時に示唆されます。

しかし、授業全体をよく理解できたか尋ねた設問14では、「そう思う」と「そう思わない」がともに27.3%(3名ずつ)で、残りが「どちらともいえない」と回答したことに鑑みると、「高度な課題に意欲的に挑戦に挑戦した」結果と単純に好意的に評価することはできず、授業内容が消化不良に終わってしまった可能性も大いに残っていることが示唆されます。

実際、説明の仕方が分かりやすかったか尋ねた設問9や、質問等を促して適切に対応していたかを尋ねた設問11に対しての「そう思わない」という回答や、授業内容に興味を持ちより深く学びたいと思ったか尋ねた設問15に対しての「全くそう思わない」という回答が、それぞれ9.1%(1名)ありました。仮にこれらの回答が全て同一人物によるものであるとすれば、一名のみとはいえ、全体的に否定的な評価ばかりを回答した学生がいたことになります。

また、全体として個別的で適切な指導がなされたか尋ねた設問13では、10%(1名)が「強くそう思う」、30%(3名)が「そう思う」と回答したのに対して、30%(3名)が「そう思わない」と回答し(、残りの30%(3名)は「どちらともいえない」と回答し)ており、この点で評価が分かれたことからも、個別最適化された指導が行き渡らず一部の学生に偏ったというような、アンバランスな印象を与えた可能性も示唆されます。

したがって、授業内容を全体的にもう少し易化させたり、高度な課題でも全員

が十分に消化・克服できるようにきめ細かく指導・フォローを充実させたりといった対策を、より多角的・慎重に進めていく必要があると考えられます。

主な具体的課題としては、設問 17 の「難しいと思った課題の内容」(複数回答)に対して、回答 1「(グループワーク中の)協働作業・学生間のコミュニケーション」が 54.5% (6 件)、回答 8「プレゼンテーション(発表)」が 63.6% (7 件)と、ともに過半数となった点が挙げられます。

仮に、高校時代のコロナ禍(や不登校、通信制の環境など)の影響から、対面状況でのグループワークや発表経験自体が少なく、もともと苦手意識の強い学生が多いとしても、これらの課題は、後期・基礎演習 でも引き続き(/ 前期以上に) 社会人基礎力の育成を重要な目的としている授業内容の中核を担うことになるため、教員が適切に仲立ちをするなどの対策を積極的に行っていく必要があると考えられます。特にプレゼンテーションについては、自由記述欄で多く見受けられた、練習・実践の回数や具体例を伴う指導・コメントの増加に対する要望への対応を、可能な限り図っていく必要があると考えられます。